母子相関の内分泌学的側面

水　野　正　彦（東大産婦人科）

母子相関は妊娠中よりすでに存在しているが，生後の母子の最初の接触は授乳行為を介してなされ，母乳の良否は健全なる母子相関の早期確立に大変重要な意義をもつと考えられる。我々産婦人科医は母親を妊娠中より管理指導する立場にあり，母乳哺育を推進すべく多大な努力を払っている。

母乳促進の指導を行うに際し，実際の母乳分泌がいかなる因子により影響されているかを知ることは肝要である。今回産褥初期（産褥１～５日目）の乳汁分泌が産科学的背景といかに関連しているかを検討し以下の知見を得た。予備調査で産褥初期の乳汁分泌状態はそれ以後の母乳の状態と密接な関連があることを確認した。

〈成　績〉

(1)　経産回数と乳汁量を比較すると産褥１～４日目までの乳汁量は初産に比し経産婦で有意（P<0.01）に多く５日目で両群は同量であった。

(2)　母親の年令の上昇に伴い乳汁量が減少する傾向がみられた。初産経産とも２０～２４才で乳汁分泌は最も良好で３５才以上では両群とも産褥乳汁分泌量の継日的増加は緩徐であり産褥５日間の合計乳汁量は２０～２４才と比較すると初産７７％，経産５５％であった。産褥４日目までに一日の乳汁量が一度も１００ml を越えない場合を乳汁分泌不全と定義すると年令の増加と共に乳汁分泌不全例数は増加し特に３０才以上の初産では２６％と高率であった。

(3)　分娩時出血多量（５００ml 以上）では産褥５日間の合計乳汁量は出血が５００ml 未満の群と比較すると初産，経産とも各々７０％，６６％と有意に低下していた。

(4)　分娩所要時間が２４時間を越える分娩遷延群ではそれ以下の群と比較し有意な低下を示した。

(5)　陣痛誘発や増強，或は児分娩後の子宮収縮促進の目的で oxytocin や prostaglandin を使用すると乳汁分泌不全の頻度が増加した。

(6)　帝王切開群では産褥初期の乳汁分泌は一般に確立するまで時間を要し，産褥１０日目で経腟分娩群の５日目に相当する乳汁量であった。

(7)　生下時体重３０００g 未満の群では３５００g 以上に比較し産褥３～４日目で乳汁量が有意に減少していた。早産例でも児体重が少なく乳汁量は一般に低下していた。

(8)　乳汁分泌に最も中心的役割を果たすホルモンである prolactin は分娩時には経産回数や子宮収縮剤投与の有無で差異を認めない。また乳汁分泌が本格的となる産褥４日目においても prolactin 値と乳汁量との相関は認められず，少くともヒト乳汁分泌量には prolactin 値は直接的意義をもたない。

本研究により，産褥乳汁分泌が産科的諸因子により影響されることが明らかとなった。その原因を分析すると，母体の全身状態および乳頭刺激の強度，乳管の開口状態などの局所因子が乳汁量を決定する重要な因子であることがうかがえた。他方，乳汁分泌には多くのホルモンが関与するが，少くとも血中の prolactin 値と乳汁量との間に有意な相関は認められなかった。